

# 日本人の外国人受け入れに対する意識とその変化

—ISSP 2003, 2013 の分析から—

東北大学 永吉希久子

## 1 目的

本研究の目的は、日本人の外国人受け入れに対する意識を、「日本人」の文化的同質性を維持しようとする意識（同化意識）とのかかわり、およびその変化に焦点を当てて描き出すことにある。同化意識は、日本において排外主義（金 2015）や分離主義的態度（Nagayoshi 2011）を生む基盤となっている。他方で、指標の違いによる影響は無視できないものの、Richey（2010）は同化意識がむしろ排外主義を緩和させる傾向を示しており、同化主義と外国人受け入れにかんする意識の関連は研究間で一致していない。そこで本稿では、これらの意識の組み合わせを潜在クラス分析を用い探索的に描き出すことで、同化意識と外国人受け入れにかんする意識の複雑な関連を示す。

## 2 方法

上記の目的のため、International Social Survey Programme の National Identity をテーマとした 2003 年、2013 年のデータを用い、分析を行う。用いる主な変数は、「本当の日本人になるためには、日本の慣習や伝統を身につけなければならない」（同化意識）、「外国人や少数民族の人たちが自分たちの慣習や伝統を守れるよう日本政府は援助すべきだ」（文化保護支持）、「（日本に定住しようと思って来日する）外国人が合法的に移住した場合は、日本人と同じ権利を持つべきだ」（権利付与支持）、および「日本に定住しようと思って来日する外国人は、もっと増えたほうがよいと思いますか、それとも減ったほうがよいと思いますか」（増加支持）への回答である。これらの意識をもとに、潜在クラス分析を行い、意識の組み合わせのパターンおよびその規定要因の時点ごとの変化を分析した。

## 3 結果

分析の結果、2003 年では同化意識が高く、受け入れ増加に否定的なタイプが多数派であった。このタイプは権利付与支持や文化保護支持に対しては明確な傾向をもたない。次いで同化意識と文化保護支持、権利付与支持がすべて高く、受け入れ増加には中間的なタイプの割合が高かった。一方、2013 年にはすべてに対して中間的な回答をするタイプが多数派となり、次いで文化保護支持と同化意識、権利付与支持に加え、増加支持も高いタイプの割合が高かった。また、ごくわずかではあるが、受け入れ増加だけでなく、権利付与や文化保護についても明確に否定的な傾向を示すタイプも出現していた。2003 年、2013 年ともに、これらのタイプと年齢、学歴、職業などの属性の関連は弱かった。

## 4 結論

実態としての受け入れが進む中、外国人受け入れに明確に否定的な同化主義者とともに現れたのは、多文化主義的立場ではなく、「日本人」の文化的固有性への信念を維持しつつ、「外国人」の文化の保護や権利を認め、さらなる受け入れも支持するという立場である。これらの意識は重要な社会的属性によって分断されて形成されていない、「《浮遊》している社会意識」（金 2015: 47）といえる。

## 文献

金明秀, 2015, 「日本における排外主義の規定要因」『フォーラム現代社会』14: 36-53. Nagayoshi, K. 2011. "Support of Multiculturalism, but for Whom?" *Journal of Ethnic and Migration Studies* 37 (5): 561-78. Richey, S. 2010. "The Impact of Anti-Assimilationist Beliefs on Attitudes toward Immigration," *International Studies Quarterly* 54: 197-212.